短歌

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる　　正岡子規

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす　　与謝野晶子

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき　　若山牧水

やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君　　石川啄木

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ　　斎藤茂吉

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく　　齋藤　史

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも

野に捨てた黒い手袋も起き上がり指指に黄な花咲かせだす

水滴よりつめたく断を下すものわれの背筋に添ひて流れつ

ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにがし　寺山修司

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや　春日井建

太陽が欲しくて父を怒らせし日よりむなしきものばかり恋ふ

母にはじまり無限の人を並べたる不滅の列にわたしはをらず

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ　俵　万智